

感性に培う

何十年か前、某国立附属小学校の研究テーマに「感性に培う授業の創造」というものがありました。「感性を」ではなく「感性に」でした。もし、「感性を」であれば、それが培うべき目的となり、授業はそのために組むということになります。「感性に」ならば、既に子どもたち自身の中にある感性をもとに授業を組むという意味になります。この場合の目的とは何でしょうか。あえて言えば、既に子どもたち自身がそれぞれにもっている感性を信じ、それに依拠しつつ、教師が練りに練って授業を創造していくこと一になるのでしょうか。こうした授業を通して学力をつけるという、教育の一般的な目標達成を目指していたと思われまふ。感性とは「物事を心に感じ取る能力」と辞書にあります。知・情・意がバランスよく育つことで感性も磨かれます。日々の生活経験や学習経験によって磨かれた子どもの感性が授業の中で輝き、知識・理解・技能や表現力が向上。それとともに自ずと感性も磨かれていきます。

9 月後半から音楽会練習が本格化しました。合奏では、まず分担する楽器選びから始まり、最初はパート練習。まだ自分の受け持つ部分を演奏するのがやっとでした。そこから各パートで音を合わせるまでにかかりの日数を要しました。そして全体での音合わせ。これも合わせるのがやっとというところから、互いの音を聴き合い、音を響き合わせるまでに、また少なからず日数が必要でした。歌も同様です。テンポ、抑揚、響き合い…。私は時折、練習風景を覗いてみたのですが、どの学年も確実に上達していきました。特に今週、まとめの段階に入ってから「よくぞここまで」と感じるほど美しく響き合ってきました。

感性という言葉に音楽はぴったり当てはまるような気がします。心情的な部分を揺さぶられるからかもしれません。音や声のハーモニーを心に感じ取り、その心地よさを味わい、楽しむ。もっといい音を出そう、いい声で歌おうと子どもたちは歌い方や演奏を一層工夫し努力する。こうした活動の繰り返しで（音楽的）感性が自然に磨かれていく。

私たち教職員は子どもたちの磨かれた感性と自ら伸びようとする意思に依拠し、それを信じ、技術・表現力を高める指導を行う。いわば子どもの中にあるダイヤモンドの原石を子どもとともに磨くという共同作業をしてきたようなものです。

明日は音楽会。子どもたちにとっては楽しみごとでもあり、緊張する行事でもあります。しかし、子どもたちは本当にけなげに練習に取り組んできました。これまでに磨かれた自らの感性に信頼を置き、自信をもって本番に臨むよう励ましてあげてください。